

壮族の歴史起源と文化 其の二 (翻訳『壮学叢書・総序』)

首席編輯者・張声震

翻訳：項 青

【訳者前書き】

本論は1999年に着手された壮学叢書シリーズ（広西民族出版社）総序の一部を翻訳した。壮学叢書の総責任者は、広西壮族自治区副主席で、壮族出身の壮・タイ語研究者張声震氏（故人）である。張氏は1985年政界から引退したのち、中国西南民族研究学会や広西壮学会の名誉会長に就任し、西南部や広西壮族自治区の少数民族文化を救うために尽力した。それらの文化遺産を熱心に蒐集・整理し、研究を行った。そして『古壯字字典』、『広西壮語地名選集』、『壮族通史』、『壮族民歌古籍集成』等、数十巻にわたる壮学叢書を出版した。

その主なものは『壮・タイ民族伝統文化の比較研究』、『壮族の自然崇拜』、『壮族の銅鼓研究』、『壮族のトーテム考』、『壮・侗族の民族建築文化』、『師公・儀式・信仰——壮族民間師公教の研究』、『中国壮族薬草学』、『壮族麼經布洛陀影印訳注』、『壮族神話集成』などである。

『壮族神話集成』（広西民族出版社 2006年2月）の出版編著の首席編集長・農冠品氏は同じく壮族出身の研究者であり、中国民間文藝家協会の副主席、広西壮族自治区文学芸術界連合会元研究職の副主席でもある。『中国民間文学集成・広西篇』、『中国歌謡集成・広西巻』、『中国故事集成・広西巻』、『布洛陀經詩訳注壮族史詩』、『壮族長歌・嘹歌』、『瑶族史詩古籍版』等の編輯作業に参加し、首席副編集長と主任研究員としての力量を遺憾なく発揮した。また少数民族文化を守るために働き、国や自治区からも数々の賞を贈られた。

『壮族神話集成』及びそれに関する研究論文の翻訳は、四・五年前から項青と田畑博子（中国曲阜師範大学翻訳学院日語教師・文学博士（民俗学））の二人が着手し、細々と続けている。膨大な量であるので遅々として進まずにいたが、ようやく『熊本学園大学文学・言語学論集』第25巻第2号・第26巻第1号合併号（2019年）に総序の前半部分を載せ、後半部分を今回載せることで総序のみ完結することとなる。前回と今回分を合わせて『壮族神話集成』846頁中のわずか18頁である。現在も壮族神話を引き続き共同翻訳している。

壮族については、55ある中国少数民族の最大民族であるにも関わらず、日本への紹介が進んでいない。日本の稲作文化を考えると、中国南方に位置する壮族自治区の文化に触れないわけにはいかない。しかし日本では、ここに書かれた「那文化」に関する論文や資料を目にすることは少ない。今後壮族の「那」についての研究が進むことは日本の古代の文化の基層の解明に繋がるのではないかと考えている。

※なお本文における注釈は、すべて訳者によるものである。

[項 青^[1]]

壮族の歴史起源と文化

第三章、壮族の歴史起源と発展

（一）統一多民族国家の中での壮族及び先住民文化の発展

秦漢以後、中原の漢民族は南に移動し、越と混じり合った。2000年以上の歴史の過程の中で、互いの文化の衝突、融合、整合などを経て、壮族及び先住民の文化の発展は次の三つの態勢となった。

1、嶺南東道^[2]で現在の広東省西部、広西東部、北部地域の越人は、唐代以後から漢民族と融合した。ただし、漢越が融合した後の新漢人は、多くの越文化の特徴を保っている。彼等は中原の漢人ではなく、嶺南化した新漢人である。

このような融合は、しだいに進んでいく過程の中に、融合を促す要素が多方面から見られる。そのうちのひとつに、軍事による征服、政権による統治の要素がある。例えば秦と甌の戦争、漢武帝が南越を平定すること、馬援の南征^[3]等がある。しかし全体で見ると、主な原因は、中央王朝の民族政策と漢民族の高い文化の影響力のためである。民族政策方面においては、南越国に対して「趙佗変服^[4]」があり、「和輯百越^[5]」という政策を行い、漢族との融合を打ち出した。

嶺南越族、中原漢族はともに農耕民族であるが、その違いをみると越族は水稻栽培を中心とし、漢族は乾地農業を中心としている。その生産生活の形式は、たとえ違いがあっても一致する部分が多い。漢民族の先進的な生産力は、漢人とともに嶺南に伝わった。例を挙げるなら、鉄の鋤の使用である。牛によって畑を鋤で耕すという漢民族のやり方は、すぐに越人に受け入れられ、嶺南の経済発展推進に多いに役立った。中原漢民族の儒教文化も嶺南に伝播し、そして越人の文化と結びつき、越人の社会的発展と越漢民族の融合をいっそう促進した。それらの歴史を通してみると、融合政策に関して軍事征服同化政策を強化することは、むしろ越人の反発を招き、激しい闘争へと導いている。文化的な感化や、自然に同化する先進文化の影響などは、民族融合を促進するもっとも有効な手段であることを証明している。漢族と越族の間に宗教信仰上の対立はみられない。彼らは同じ所に混在して住み、頻繁に往来する。そして互いに婚姻を結ぶ。このような文化的な認め合いは、越の広東省の西、広西北といった地域の民族融合の素地となる。そして融合した後の漢民族は、多くの越文化の特徴を保っている。言語で言えば広東の西部と広西東部の地域では、広く広東語（粵語）を使う。その広東語の中には、漢語と古代越語の二種類の語彙と文法が存在する。専門家の研究によれば、百越語の語彙は現代広東語の中の20%を占めている。その多くは動詞と形容詞である。通常では「核心詞」は中心的な語彙として、他の言語語彙と

組み合わせていろいろな構造をなしている。そしてセンテンスの中で重要な部分を担っている。経済生活方面においては、都市部に住む漢民族を除いて、総括的に言うならば山村に住む漢民族は、すでに越人の「那」文化^[6]を引き継いでいる。「那」によって住み、「那」によって食し、「那」によって服を作り、「那」によって楽しみ、「那」を中心とする生産生活の様式となっている。漢民族の文化、生産技術力により、民族融合後の嶺南漢民族地域の生活レベルは、純粋な壮族の地域より高い。彼らの生活習慣や、彼らの祭りなどの風習は、中原文化の要素と混じり合いながら大量に越文化の要素を含んでいる。彼らはもうすでもともとの中原型の漢人ではなく、嶺南化した漢民族である。

2、嶺南西道は現在の広西の西南、西北、中南及び雲南省の東、貴州省の東、広東省の西地域を含んでいる。この壮族と先住民は、主体性と開放性とともに民族文化の特性を作り上げている。

広西の西南、西北、中南部及び雲南東、貴州南、広東西は、辺鄙な地区にあり、山は険しく交通は不便である。古くから経済の発展が遅れ、漢民族文化の取り入れは東部地域より遅い。民族の意志は強固なものであり、中央封建王朝との衝突によって関係はしばしば悪化した。唐、宋、元、明、清の歴代の中央王朝に反抗する暴動が絶えず起こった。この地域の壮族の伝統文化に対する自我意識は、非常に強い。しかし漢民族文化に対しては積極的に受け入れる包容力があつた。しかも非常にうまく吸収融合し、また新たな創造の精神を持った。以下、それらについて示す。

(1) 民族言語の本質の一致性を保持し、漢字を利用し、またその象形文字の構造を使い、壮族の音意の民族文字を作った。

氏族集落時代から壮族と先住民は、絶えず自分たちの民族の文字を作っていた。秦、漢代以後、中原文化は南に伝播し、壮族が初めて漢民族の文化と接した

が、その中に漢民族の文字が含まれている。唐、宋時代から壮族の知識人達は、漢字の形、音、意味と六書構字法を利用して、正方形の壮文字を作った。これは民間において広く使われている。例えば「田」は、壮語では「那」であるが、「𪛗」とした。上は音で、下は意味である。また「年」は壮語では「卑」で、文字は「𪛗」である。左は音で、右は意味である。壮語はこのような土俗文字を使って、民謡、故事、伝説、写経、契約、記帳などに用いた。唐の永淳元年(682年)澄州(今の広西上林県)刺史の韋敬弁は、『澄州無虞県六合堅固大宅頌』の磨崖石刻の中で、この四角の文字、土俗文字を使っている。また宋代の范成大撰『桂海虞衡志』と周去非撰『嶺外代答』などの書物の中にも、この文字に関する記録がある。范氏は、次のように言った。「辺鄙な野蛮、訴訟状はもっぱら土俗の文字を用いて記されていた。桂林のもろもろの村も、みな同じであった」と^[7]。

明代に至ってこの土俗文字は、壮族民間の書承文学に用いられる。清の初期、潯州(今の広西桂平市)の推官(裁判を行う官職)呉淇撰『粵風統九』の中に、畧俚と壮族の「扇歌」、「扁担歌(天秤棒歌)」と、「巾歌(頭巾歌)」等が収録されている^[8]。これは壮族の若い男女が、恋歌を扇の表に、あるいは天秤棒、頭巾に書き、相手に渡したものを指す。

ある地方ではその土俗文字で編纂された歌掛け^[9]の本を使って、歌仙の「劉三姐」を祀る。その歌集は、箱単位で集計するほどの量である。清の屈大均撰『廣東新語』巻八「劉三姐」の条には、「およそ歌を作る人は、庶民はもちろんのこと、瑶(ヤオ)族、壮(チワン)族、山で仕事をする人なども、歌を作るならば必ず祭壇に捧げて祀る。そしてそれを大切に保管する。歌を求めるものに対しては、それを貸し出して写させる。しかしそれは持ち出すことを認めない。そのためしだいに増えていき、数箱になった」と記す^[10]。

右江の山の谷間に住む壮族に、伝統的な「嘹歌」^[11]が流行していた。それは一万六千行ほどのものがあり、土俗文字をそのまま写させ、流伝している。清の道光11(1831)年に刻まれている広西の宜州市安馬郷古育村の廖士寛という方の墓碑に詩がある。その詩は土俗文字で刻まれている。五言体の壮歌で、合わせ

て120行あり、この墓の主の一生をいきいきと伝えている。明清以来、各地にある歌の館・師公館では、すべて土俗文字で歌を伝授し、師公^[12]の経文の唱本も土俗文字で記録されている。壮族の麽教経典『布洛陀』も、この土俗文字で記録されている。

壮族の社会生活の中において、文化発展史上に地方の言葉（古代壮族の文字）は、重要な役割を果たしている。しかし歴史の要因によってこの土俗文字は、いまだかつて統一、規範が作られたことがなかった。ただ民間人において限られた範囲で使用されてきた。中華人民共和国成立以来、このような四方形の壮族の文字を使って書かれた古書籍一千部あまりを蒐集し、1980年代に『古壮字字典』が出版されたが、そこには古い壮字が1万あまり収録されている。そのうち常用字の4000余りの字がいまだに民間で使用されている。二十世紀五十年代、国は壮族のためにローマ字を使って壮語の教材を作り、1957年に國務院の許可を得て、土俗文字の壮字が壮族地域で広く使用できるようになった。それは一定の効果をj得ている。

(2) 漢族の宗教文化を吸収して篩 [θai1] (師教)を代表とする多神信仰の民間宗教が形成された。

壮族の信仰は、多神教である。地理、歴史、文化教育は、多くの民族が雑居するという要因によって、壮族の各地域に漢民族の文化の影響が及んでいる。宗教信仰について言うなら、道教の正一派の影響が一般的である。しかしそれが伝道された後、重なる変容を経て現在の壮伝道教となっている。正一派道教と変容した壮伝道教の違いは、道観（道教の寺院）はないが、道士の集団があるという点である。その集団は「壇」と称し、一壇には、5人から12人ほどいる。

広西壮族自治区の西部には、古くから独自の民族宗教・麽教がある。民間に流布し、時には一人の神職が、ある時は麽公であり、またある時は道公を兼任するという現象が見られる。広西の中部地域は壮族と漢族が雑居し、壮漢文化の融合

地域である。明清時代に壮族の原始宗教と民間歌舞の基礎となる道・仏混合の師教が形成された。俗に「師公」と称する。壮語で「篩」[θail] と言ひ、意味は聡明、先覚である。この宗教は比較的整った経文、唱本、そして教義があり、師館を設けて弟子にそれらを伝授する。入教者は必ず師を拝み、入門の礼を行って受戒させる。勉強として経文（唱本）を暗唱させ、舞の技法を練習し、呪術、雑伎などの専門技術などを覚えさせる。見習いを経て三年で、ようやく独立できる。入教者は、すべて「師公」と呼ばれる。およそ半分農業、半分師公という兼業形態である。

師公が崇拝する神はたくさんある。一般的には36神72の相（顔）と言われている。ただしその他の神は、100以上ある。その中の本教の主神は、梅山教派の祖師神が三元（すなわち唐道相、葛定志、周護正）であり、三界公、土地神、社王などがある。道教の神は玉皇大帝、三清（上清、太清、玉清）、張天師、真武、太上老君などがある。仏教の神は釈迦、観世音菩薩、羅漢などがある。在来土俗神は布伯、莫一大王、甘王などがある。

また師公には、二つの教派がある。茅山派の経文は漢文であり、法事をするときは経文の暗誦が中心となる。「文師」と称する。梅山派の経文は、その多くが古い土俗文字の唱本であり、壮語で唱える。法事は武術の演舞が主である。「武師」と称する。師公の宗教的機能は、主に庶民のために災いを祓うお札を書いたり、邪気を祓い、祭壇を設けて祈願をすることである。また亡霊を救うなどの法事を行う。

師公は、定型の法事の形式を持ち、決まった舞を舞う。神霊の仮面をかぶって唱える。師公の唱本の内容は豊富である。先祖の良い行いを宣伝し、民族の歴史、生産知識、倫理道德、生活風習、神話、伝説、民間故事などを唱える。その儀式は、歌、舞い、わざで三位一体となる。壮族、漢族文化の融合の産物でありながら、壮族伝統文化発展の昇華である。近代に入ると師公の宗教歌舞の基礎の上に、さらに発展させた「師公劇」^[13] が成立した。地方の特色ある師公文化体系を成し遂げている。

(3) 氏族集落の「都老」制を中心とする社会組織構造の延長

壮族社会は、一夫一妻制の家庭を中心とする。各家庭の上に家族があり、家族の上に宗族がある。こういった集落の構造が成立した理由は、移住及び家族、宗族の形成にさまざまな要因があるからである。壮族地域においては、長期にわたって「都老」[tu21a:u4]（頭人、長老、大首領の意）、または「波板」[po6ba:n3]（集落の父、すなわち頭人）という社会組織が存在している。「都老」と「波板」は、壮族の村単位の実力者であり、高い人望と権力を持っている。壮族の地域では古く唐代から「羈縻制度」^[14]を実行し、宋代には「土官制度」^[15]を実行し、明代には「改土帰流」^[16]等の特別制度へとしだいに変わっていくが、「土司制度」^[17]だけは、中央王朝の壮族社会に対する間接的統治の形式である。

(4) 民謡を主流とした歌掛け形式の文学芸術

壮族民間文学の歴史は長い。内容は豊かで素材は広く、形式も多様である。その中でも伝統的な歌謡が最も有名で、特色がある。トーテムを歌い、創世史詩を歌い、神話、伝説や歴史物語を歌う。風俗的な歌謡や恋愛歌、季節ごとの節句歌、季節の風物を歌う。そして生産叙事歌と倫理道德などの様々な題材を歌っている。子々孫々まで歌い継がれ、壮族伝統文化の主流となっている。民謡は庶民が創作した芸術であり、同時にその芸術を鑑賞できる民衆を生み出すものでもある。壮族の人々は、先住民の古越人の「越の声を尊ぶ」、「越の歌を創作する」という風習を継承してきた。清の李調元撰『南粵筆記』「粵俗好歌」にある「東西の粵、みな歌を尊ぶ。そのうち特に西の粵の土司にはもっとも盛んである」^[18]という表現をそのまま残している。

壮族の人々が歌を好むという習慣については、唐宋以来、しばしば記録されている。特定の地理環境、生産方式、そして民族文化の心理が壮族の歌好きという特性を作り出した。幼い頃から歌を習い（「自幼習歌」）、歌で配偶者を選ぶ（「倚

歌扱配）」といった風習、「すべての喜びは歌を伴って喜ぶ」、また「歌のうまい人はすべての人々から敬われる」という社会的風潮もあった^[19]。統一された文字のない長い壮族の歴史の中で、人々はこのような技をすぐに身につけ、記憶しやすい歌唱形式を通して、民族の歴史や文化を一定のルールに従って伝承してきた。人々は感情のやりとりを歌で表して交流し、民族の歴史や文化を歌って伝えた。民族の誇りを求めることを目的としながら、壮族人にとっては、一種の特殊な民族心理であり、人生観であり、美学でもあるという意識を構成した。劉錫蕃撰『嶺表紀蠻』の中に、「人々は男女とも歌を人生の最も大切なものであると認識している。人が歌うことができなければ、社会上で孤立し、淋しい思いをする。すなわち配偶者を得る可能性がなくなる。なにより古今東西のあらゆることを知ることができない。まるで豚と同じく、愚かな者となる」と記されている^[20]。壮族の人々は、このような価値観と美学をもって自身の価値及び社会活動の指針としている。それゆえ歌掛けはいっそう社会的な機能化を促し、思想を豊かにした。人々の生きる願望、理想への追求、恋愛感情の交流、生産の知識、歴史物語、道德規範、そして冠婚葬祭といった儀式においても、常に歌をもって表現する。何かことがあれば必ず歌い、至るところで歌わないことはないと言える。それは壮族の人びとの詩的な思考力を養い、発達させた。この発達した詩的思考力があればこそ、今のような歌掛けの文化が存在する。「詩は歌なり」の歌掛けは文化と音楽の融合によって生まれた民間芸術である。歌掛けは壮族の生活の中で重要な位置を占め、またその民族性を持つ文化共同体のシンボルでもある。その中で年に一度の歌掛けの祭りは、壮族伝統の歌の大集会である。ゆえに「広西は歌の海であり、歌墟（歌掛け）はその集大成である」という諺がある。

いわゆる歌墟^[21]は、人々が集まって群れになり、楽しく歌のやり取りをして、男女が情を交わす場である。北方壮族の方言は「墟蓬」[hu1fan2]と言い、意味は「楽しい市」である。南方壮族の方言では「航端」[ha:ŋ6ton6]と言い^[22]、「村の田んぼ収穫の市」を意味する。歌墟の活動形式は『詩経』の「溱洧之風」に載っているものに近い。その起源は氏族集落時代の集団祭祀の「歆敢」[fweŋ1ka:m3]

である。すなわち岩洞を祀る儀式から人々を楽しませる劇的な変化を成した歌という意味である。「歆敢」から「墟蓬」までの発展過程の中で、神に歌や踊りを捧げる

研究によれば、今日の歌墟^[23]は、唐代に既に成立している。歌仙劉三姐の誕生は、歌墟を形成するシンボリックな存在である。劉三姐は、現実生活の中で歌の才能が開花した歌師（歌の先生）という化身であり、人間の聡明さ、歌のテクニク、そして精神力を求める人々に偶像化された崇拜の対象であった。また歌の神聖化の表れでもある。それと同時に壮族と漢族の二つの文化の衝突した産物でもある。唐宋時代は、詩詞歌賦が盛んであった。そのような折、多くの著名な文人、学者が広西に流罪となった。有名なのは唐の柳宗元、李商隱、宋之問、元結、宋の秦觀、黃庭堅などである。彼らは現地で漢民族の文化を積極的に広め、普及した。壮族の民間歌謡に対してある程度の影響を与えた。例えば壮族の伝統歌謡はもともと五言で、腰脚韻をふむ形式を中心とする。唐宋以後は、漢民族の律詩の七言の韻をふむに類似したような壮族の民謡が生まれた。一部分の歌詞は、壮族の歌として歌うことができる。また漢語でも歌える。漢民族の民間伝説や、歴史物語を民族の言葉で語れるようにした。例えば「歆英台」はすなわち「英台歌」で、「歆唐皇」は「唐皇歌」である。壮族の民間で広く流伝した。さらにおもしろい言い伝えには、北方漢民族には文人の中に「詩聖」がいるように、嶺南には壮族民間伝承の庶民派「歌聖」の劉三姐がいる。すなわち庶民の劉三姐は、辛口で鋭い皮肉な口調で船に歌の本をたくさん積んでいた三人の秀才をからかい、山歌の形式を持って知識のある文人を勝ち破ったという伝承がある。しかし後ほどには一部の文人が書き直した「劉三妹伝」の中には、彼女は四書五経に通じ、きちんと詩を読める正真正銘の才女であると書かれている。才女の劉三妹は、秀才との歌掛けの内容も上品な内容に変わっている。その内容の変化は庶民的な歌に勝っているようにみなされている。こういったことは二つの文化の概念、文化の風格、そしてそれぞれの美的なセンスの違いと衝突を、はっきりと反映している。世に伝わってきた劉三姐の山歌は、その多くが七言四句の形式であり、漢民族の言葉

で歌われている。これも唐代の竹枝詞^[24]と深い関わりがある。これは明らかに民族文化の交流の産物である。もちろん五言の韻をふむ形式の壮語の歌はいまだにあり、依然として壮語の歌の主体となっている。例えば「布洛陀経詩注」、「欽榔」「欽歌」、「嘹歌」など、すべてその代表作である。

民謡は我国の文学における重要なジャンルの一つであり、中国文学史のスタートは『詩経』から始まる。数千年以来、漢民族歴代にわたって豊富で多彩な民謡が生まれ、絶えず伝承されている。しかし歴史の要因によって、特に士大夫階級の文人たちは、文壇を独占し、民謡を「田舎の男女が下品に語るもの」と見なしている。文字による採録さえも拒んでいた。そのため漢民族の間に流布する民謡は少なかった。それと反対に壮族の民謡は、独自の文化として伝承されていたため、長い時を経てもその伝統は維持することができた。

特定の歴史背景、生活環境、民族文化及びある特定な条件の下で形成された歌墟は、一種の民俗事象であり、独特な民族文化、芸術文化の表現形式でもある。さらに人々の社交の場でもある。重厚な歴史性、社会性を持つ。壮族の伝統民謡は、歌墟によって代々伝承され、また時代とともに発展し、内容もますます豊かになり、壮族文学の主流となった。「歌墟」は壮族文化の特徴と共有する心理素質、美的な要素を集中的に反映している一方で、壮族の民間芸術の自然的社会機能を充分に現している。

(5) 封建社会の圧迫に反抗する民族精神の維持と継承

秦の始皇帝が嶺南を統一してから民国時代までの2000年あまりの間、壮族及びその先住民たちは、統治階級による民族圧迫に反抗し続け、一度も中断することなく闘争が続いた。その中で影響の大きいものは前漢末期の句町・王邯の闘争である^[25]。また後漢の烏諱人^[26]、唐の「西原」僚人黄乾曜の蜂起^[27]、宋の區希范^[28]、儂智高^[29]、明の韋銀豹などの武装蜂起・八寨郷の農民運動^[30]、清の太平天国の農民運動^[31]、辛亥革命前の会党運動等^[32]と、孫文をリーダーとする武装蜂起

に合流する事も大きな影響を与えた^[33]。現代に至り、壮族人民は積極的に中国共産党の土地革命に参加し、中日戦争と全国解放運動にも進んで参加した。

毛沢東に称えられた壮族の英雄・韋拔群は、早くも1921年に共産党に協力し、東藍県武篆区で「改造東藍同志会」を成立させた。そして韋拔群は、多くの民衆を引き連れ、農民運動に参加し、その後も中国共産党の指導の下、多くの農民運動のリーダーを育成した。さらに1929年の鄧小平、張雲逸をリーダーとした百色（地名）武装蜂起のために堅固な基礎を作り、中国革命に貢献した。これらはすべて壮族人民の逞しい精神を現し、このような闘争史の中に燦然と輝く歴史を刻んだ。そしてさらに政権側にさまざまな譲歩と民族政策の改善を約束させ、壮族の歴史の前進を後押しした。

3、広西壮族自治区の西部、少数の漢民族は、長い間越人と交じり合って暮らし、越人に吸収された

このことは中国漢族と少数民族の融合の歴史の中で、きわめてまれな現象である。例えば広西西部の靖西、徳保、那坡などの県において、古代から近現代まで相当数の漢民族は、役人、軍人、商売人、開発者としてこれらの地域に移住した。しかし現在これらの県の壮族の人数は、95%以上を占めており、そのうち靖西県の壮族人口は99.4%、徳保県の壮族人口は97%で、それは移住した漢民族の大部分がすでに壮族の中に融合したことを示している。

（二）壮族文化と華南地域、東南アジア及び環太平洋地域諸民族文化の根源的な関係と、人類文明史の中の位置

二十世紀九十年代、我国の学者は、「那」文化と「那」文化圏の概念を打ち出した。これは十分に根拠のある学説である。珠江水系の水域に、「那」という漢字がついている地名が多く分布している。そのうち特に左江、右江、紅水河、邕江流域は、もっとも密集している。またベトナムの北部、ラオス、タイ、ミャンマーとインドのアッサムなどの東南アジア地域にも広く「那」という発音の地名

を持つ場所が存在する。「那」は、侗傣語の地名であり、那文化圏を意味するものでもある。すなわち稲作文化を含めると同時に壮民族の文化も含まれている。「那」の地名の分布は、中国の南部や東南アジアにおいてかなり広い地理範囲を有している。東は広東省中部より東側、西はミャンマーの南部とインド西部のアッサム地域、北は雲南省の中部、貴州省の南部、南はタイの南部、ベトナムの中部と海南島、それらがすべて那文化圏である。那文化とはすなわち稲作文化であり、那文化圏は稲作文化圏である。那文化圏は、稲作起源地の一つである。この那文化を作り出した最初の居住民は、侗傣語系といった同一の特徴を持つ集団である。この集団には、我が国の壮族、布依族、傣族、侗族、水族、仫佬（ムーラオ）族、毛南族、黎族と仡佬（コラオ）族、ベトナムのタイ族、ノン族、ラオスのラオ族、タイのタイ族、ミャンマーのシャン族、インドのアッサム族などがある。

これら共通の特徴を持つ少数民族集団は、同じ語源の言語を持つ。その上「那（稲作）」を中心とする伝統生活の様式の干欄^[34]に居住し、銅鼓^[35]を用いるという共通の文化特徴がある。壮族はこれらの民族と同じ先祖を持ち、彼らの関係は同じ先祖でありながら、枝分かれした関係である。珠江流域^[36]は、彼らの主な発生地である。那の文化圏に生活している東部の壮族、布依族、侗族、水族、仫佬族、毛南族、黎族などは、漢文化の影響により一つの方角へ向かって発展してきた。しかし「那」文化圏の西部の我が国の傣族と隣国タイのタイ族、ミャンマーのシャン族、ラオスのラオ族などは、インドの文化と仏教文化の影響及び地理的環境のため、別の方角へ向かって発展していく。壮族とタイ族を例にあげるなら、壮族は強い漢文化の影響を受けた越人の子孫であり、タイ族はインド文化と深い関係の越人の子孫である

「那」文化圏の民族及びその文化は、東インド諸島ないし、環太平洋地域の民族と文化的に共通の性質をもつ。中国内外の学者の研究によると、共通項は以下のものがある。焼き畑耕作、段々畑、祭事に犠牲（いけにえ）を捧げる、檳榔を噛む、高頂草屋（高い藁葺き屋根の家）に住む、樹皮で作った服、綿の栽培、綿

のフランネル（色彩のある綿のフランネル）を織る、ふちのない帽子、櫛をさす、歯を抜く、刺青、火縄、火起し管、一本柄のふいご、銅鑼を大切にし、竹の弓矢、吹き矢、娘宿、祭祀を重視する、首狩、人柱、竹の祭壇、祖先崇拜、多くの靈魂、銅鼓、龍船、弩箭、毒矢、梭鏢、長い盾、お歯黒、耳や鼻に穴を開ける、鼻でお酒を飲む、鼻笛、貫頭衣、衣に尻尾あり、月夜の逢引、父の一字をとって子の名をつける、犬と蛇のトーテム信仰、長い杵、二階建ての住居、藍染、岩葬、甕葬、石板葬などである^[37]。

わが国の有名な考古学者である蘇秉琦氏は、次のように述べている^[38]。

中国の考古学的な分割方法は6つの地域に分けられる。広い意味で北方の中、西北地域は、中央アジアと西アジアをつないでいる。広い東北地域は、北東アジアにつながる。東南部の沿海地域と、真ん中及び西南地域は、環太平洋と東南アジア、インド亜大陸と広くつながる。

壮族の文化と華南、東南アジア及び環太平洋地域の諸民族の文化の深いかかわりで、壮族文化の世界的な広がりを説明できる。壮族文化は人類文明の歴史の中で、重要な位置を占めている。壮族及びその先住民の文化創造と人類文明に対する貢献は、特に目立つものは以下のようなものである。

第一に壮族とその先住民は、華南珠江流域の自然地理環境と気候の特徴に適応し、野生の稲を馴化させ人工栽培に成功させた稲作文明を創り出した民族の一つである。

水稲は世界の重要な食料作物であり、全世界の約半分以上の人口は、米を主食としている。水稲栽培の成功は、間違いなく世界文明史上の重要な事である。壮族とその先住民は、稲を栽培し、稲を食用する過程の中で、「那」によって生産し、「那」によって居住し、「那」によって食し、「那」によって着物を作り、「那」によって娯楽する。「那」を中心とした生活の習慣は、南方稲作文化が北方の畑作文化と遊牧文化に並ぶ中国の三大生活圏と文明の類型を作りあげた。

第二に壮族とその先住民は、他の物質文明の分野においても人類に貢献し

た。その中、いまだに保存され現存するものは、石器、銅鼓、花山壁画^[39]、干欄式建築、陶磁器、工芸、綿・麻の紡績技術、民間医療技術、水利航運、水産養殖、果物栽培などがある。特にその石器の中で、双肩石斧^[40]は、独特な特色を持つ石で作られた道具である。この双肩石斧の基礎の上に、さらに進化した巨大な石鏟^[41]が作られた。その巨大さは世界に一つしかなく、製作技術の精巧さは、同時代の石器の中で一流のものと言える。陶器は土を焼き物に変えるという人類文明史上の重要な発明であり、人類社会発展史上画期的なシンボルでもある。桂林廟岩、大岩、甌皮岩と南寧の頂嶺山などの遺跡から出土した陶器は、世界考古学史上の中で、わりと早い時期の陶器のひとつである。1万から1万3000年前のものである。わが国の北方の裴李崗などの遺跡から出土した8000年前の陶器より、2000年～5000年ほど早い。更に壮族は最も早く銅鼓を製作した民族の一つである。広西の田東県南哈坡と大嶺坡出土した銅鼓は、春秋戦国時代の作品であり、もっとも古い銅鼓の一つである。その後、銅鼓の製作と使用は、壮族先住民地域においてずっとトップクラスを維持している。鑄造、工芸、文様の美しさは、同時期の黄河地域の青銅製の工芸品にも肩を並べるほどのものである。エンゲルスは「家畜の馴化と家畜の大量繁殖は、未曾有の富をもたらした。しかも新しい社会関係を作り出した」といっている^[42]。考古学の発見によれば、甌皮岩人は、9000年以上前から家畜としての養豚があった。

第三に精神文化面においても壮族先住民は、長い歴史発展の中で民族独特の言語を作り出し、漢字の形、音、意味、そして字の構成を利用した壮族独自の方塊字（四角な文字）といった古土俗文字を創作したのである。壮族先住民は、春秋戦国時代から後漢までに花山の巖崖に壁画を描いた。その内容は実に摩訶不思議なものが多く、人に驚かせるばかりである。巧みな絵画芸術、すばらしい規模とその勢いがあることで、世界八大原始崖壁画の一つとされている。壮族先住民は、まだ独特な歌垣の文化を創造した。「布洛陀」、「莫一大王」、「伝揚歌」などは、極めて重要な歴史文化を持つ。

それらは壮族の創世史詩、英雄史詩で、哲学めいた歌である。また原始の越人の巫文化の基礎の上に、道教と仏教の内容を取り入れ、本民族の文化特色をもつ民間宗教・麼教と師公教を形成された^[43]。

壮族は、自然界やその他の民族との衝突の中でも数千年の間、絶えることなく民族の生命の血脈をつないでいる。それによって今日1700万人余りの民族に発展してきた。全世界の2000余りの民族で、およそ第60位であり、中国の人口の最多の少数民族である。この事実によって民族生命の繁殖力と、人類と自然の融合の角度から見ても、系統的な研究をすべきであり、その研究によってさらに壮族を理解し、壮族文明史の地位を確立するものである。

第四章、壮学と「壮学双書」

壮学が生まれる基礎として、壮族の研究がある。厳格な意味での壮族研究の始まりは、十九世紀の末である。当時多くのヨーロッパ諸国の学者たちは、植民侵略のための壮族研究を必要とした。1885年イギリス・ロンドンでコフーン(A. R. Colquhoun)の『撣族について (Amongst The Sham)』という著作に^[44]、ロンドン大学のテリアン・ド・ラクペリ(Terrien de Lacouperie)教授^[45]は、この本のために序言『撣族のゆりかご (The Cradle of The Sham Race)』を書いた。これらは壮族に関する最初の論文である。その後、フランス人のピエール・ルフィーヴァ・ポンタリス(Pierre Lefevre Pontalis)は、1897年オランダで『撣族によるインドシナ侵入考 (L'invasion Thaie Indochine)』を発表した^[46]。イギリス人のH. R. デイビス(H. R. Davis)は、1909年、ケンブリッジで『雲南～印度と揚子江の間の連鎖 (Yunnan, The Link between India and Yangtzi)』を出版した^[47]。1923年アメリカ人のウィリアム・クリフトン・デッド(W. Clefton Dodd)は、アメリカアイオワ出版から『泰族 (The Tai Race)』^[48]を、1926年にはイギリス人のW.A.R. ウッド(W.A.R. Wood)が、ロンドンの出版

社から『シャム史 (A History of Siam)』を出版した^[49]。これらすべて壮族の由来と分布を論じている。

ヨーロッパ人の諸研究の後に、タイ人もこの研究に加わった。シャムの歴史研究の父と言われたコンピエダマランラツァヌバ親王は、1925年に『シャム古代史』を出版した^[50]。その中で 壮族についてかなり広く言及している。その後、タイのパイエーヌマンロトン、『タイの掸族に関する系統的な考察』の論文を書いた^[51]。そこで彼は、広西など各地の壮族の状況について数多く論述した。

しかしながらタイ人にしても、ヨーロッパ人にしても、この時代の壮族研究に関しては、民族の由来と分布しか触れていなかった。研究の手立てと方法は比較的単純であり、引用された資料、主に言語学の材料と文献による記録であり、基本的には言語学と歴史学の範疇を出ていない。研究者たちは、すべて東南アジアのタイ族を基準値として、壮族とタイ族の間に密接な関係があると気づき、その後、先入観として壮族はタイ族に属するとされた。そのため当時の壮族研究は、ただタイ族研究とタイ学の一部にすぎなかった。

二十世紀二十年代から四十年代までの間、ヨーロッパ諸国の植民者は、我国の辺境の少数民族に対してもじわじわと侵略を始めた。当時の中国政府は、辺境の少数民族に対する統治を強めながら、愛国主義の知識人たちは愛国心の情熱をもって辺境少数民族の研究を始めた。1928年、中山大学の『言語歴史研究週刊』の中に、鍾敬文は「僮民考略」などの論文を発表した^[52]。これはわが国の知識人が壮族研究の最初のページを開いたメルクマールの論文である。その後、『科学』、『新アジア』、『芸風』など一連の壮族研究の論文が発表された。

劉錫蕃は、1934年商務印書館から壮族研究の最初の著作『嶺表紀蛮』を出版した^[53]。徐松石も相次いで1935年、1946年、1947年と『粵江流域人民史』（中華書局）、『泰族・僮族・粵族考』（中華書局）、『東南アジア民族における中国の血縁』（香港東南アジア研究所発行）など出版し^[54]、外国人だけが壮族研究を独占するという局面を打破した。

外国人の壮族に対する研究は、その後、二次的な研究の地位に落ちた。外国人

で研究成果を挙げたのは、日本の学者の鳥居龍蔵だけであった^[55]。1936年に商務印書館から出版された『苗族の調査報告』(1902年に書かれた)の中で、部分的に壮族が取り上げられている。その他、河原正博は、1944年第二期『南アジア学報』に「左江、右江流域の蛮酋の始祖」について発表した^[56]。このときの壮族の研究は、範囲上において前段階の外国人の研究より広くなった。壮族の歴史、言語、風習、宗教、婚姻家庭及び壮族と漢民族との関係にわたって研究されている。

研究の手段と方法においても、フィールドワークを盛んに行い、現地調査の資料と歴史文献との組み合わせがうまくできるようになった。学問的に見ると、言語学、歴史学、民俗学の緊密な組み合わせ、共同研究によって壮族研究の新天地を拓くことができ、実りの多い結果を出した。その中でもっとも業績が顕著なのは、やはり徐松石である。彼は言語学と歴史学の知識を自在に操りながら、〈地名研究考証法〉を作り出し、それによって壮族の歴史を論証した。その上、民族学のフィールドワークの方法、言語対照法、風習対照法などをもって、壮族の民族の起源、歴史、社会、文化に対して深く掘り下げた研究を行なった。当時の社会は、不安定であり、壮族研究に没頭する学者が少なく、徐松石のほかに彼と肩を並べて論じることのできる学者はいなかった。また彼の研究を理解する人も少なく、他の研究成果もまばらで、系統化されていない。その上研究の基礎資料も乏しく、古代壮文字の文献的価値に対する認識も足りなかった。最も大切なのは、漢民族文化が中心だという歴史観の影響を多くの研究者が受けており、たとえ徐松石や劉錫蕃であっても壮族・傜族も正真正銘の漢民族であるということや、そして壮族は遠い昔の嶺南の先住民ではなく、現在もっとも純粋な漢民族であるという偏見を持たざるを得なかった。このような誤った歴史観からの影響から逃れることはできなかった。このような偏見は、常に彼等を矛盾の境地に立たせた。それゆえ当時の壮族研究は限定され、壮学という概念を打ち立てることができなかった。

新中国成立後、党と政府は民族平等、各民族の団結と共同繁栄の政策を行い、実行した。壮族は、統一多民族国家の中の平等な一員として認められた。そして民族区域の自治権を与えられた。これらによって壮族の歴史の新しいページを開

くとともに、壮族研究も前進の局面が開かれた。

一つ目の政策は、壮族研究団体と学術団体が成立し、研究の組織化をしだいに充実させた。壮族研究のために物質的、人材的基礎を固めた。二十世紀五十年代に、広西少数民族社会歴史研究チーム、広西民族学院民族研究室を設立した。六十年代に広西少数民族社会歴史調査チームの土台の上に、広西民族研究センターを創り上げた。八十年代に広西民族学院民族研究センター（後に人類学民族学研究所に改めた）、広西師範学院（現在の広西師範大学）の地方民族史研究所、南寧師範大学（現在の広西師範学院）、民族民間文学研究所（後の民族民間文化研究所）、広西芸術研究所（後の広西民族文化芸術研究院）、広西芸術学院民族芸術研究所、広西民族医薬研究所、広西少数民族古籍整理出版企画弁公室などが相次いで成立した。これらの研究団体は、九十年代になって広西大学民族研究所、広西社会科学院壮族学研究センター、中国共産党広西壮族自治区委員会大学校民族研究所、右江民族師範高等専門学校民族学人類学研究所、広西師範大学壮族研究所などを設立した。これらの研究団体は、主に壮族研究に従事している。全自治区壮族研究を専門とする専門家及び学者は、約60人あまりで、兼職で壮族研究を専門とする専門家及び学者や、実際に携わる関係者は、約400人である。同時に北京の中国科学院、中国社会科学院、中央民族大学、雲南省、広東省など各地域の壮族研究専門の関係学術機構も設立された。これらは壮族研究の発展に対して全面的に後押しをし、重要な役割を果たした。

二つ目は、科学の領域がしだいに拡大し、研究成果も数多く現れた。統計によれば二十世紀五十年代から二十世紀末まで、国内で正式に出版された壮族研究の論文集は、107冊である。そのうち101冊は二十世紀八十年代以降の出版で、全体の94%を占めている。そのほかに壮族研究の論文は、800あまりあった。壮族研究の分野はしだいに拡大し、壮族の起源、社会発展史、言語文字、古代壁画、青銅器、銅鼓文化、壮語地名、壮族宗教信仰、壮族哲学思想、倫理道德、民間文学芸術、音楽舞踏、壮族医薬、壮族風俗、壮族経済史、壮族と周辺の民族との関係など多岐の領域にわたって論じられている。

三つ目は、政府の対外開放政策によって、研究者の人的交流の範囲が広がった。そして改革開放のさらなる発展にしたがって、壮族研究分野も対外学术交流が日に日に盛んになった。特に1991年から「壮族とタイの伝統文化の比較研究」という国際合同研究プロジェクトがスタートしたことによって、壮族研究の学者たちはより視野を広げ、広西を飛び出し、壮族を飛び出して壮族を見るようになった。十年間あまりの壮族とタイの伝統文化の比較研究を通して、壮族学者とタイの学者との間に、壮族とタイ民族は同じ源流であるという「同じ源異なる流れ」の共通認識を持つようになった^[57]。比較研究を通して壮族学者は、壮族の民族の特徴に対してさらに理解するようになった。それと同時に壮族と同じ起源の民族グループの歴史文化、起源後の流れ、変化、現状に対していっそう明らかな認識を持つようになった。そして喜ぶべきことは、民族共同の起源の根拠である「那」文化の共通する客観的事実を発見したことである。我々は明確な「那」文化圏の概念を打ち出すことができた。さらにこの概念を、全面的に壮族伝統文化の最も基本的な特徴として認識することができた。全体的に壮族と壮侗語民族及び東南アジアと環太平洋地域の諸民族との文化関係を把握することが可能となった。これは壮族研究の視野を広く切り開き、壮族研究分野における重要な突破口となった。

四つ目に、多学科の総合的研究は、壮学の誕生に際して方法論の基礎を確立した。しかし依然として壮族研究は、民族学、歴史学の方法にとどまっていた。二十世紀八十年代から考古学、文化人類学、形質人類学、言語学、文字学、文化言語学、社会学などの学科が加わるようになってから、壮族研究の視野を開拓することができた。それに従って壮族研究の学術成果も豊富になった。例をあげれば、考古学や形質人類学者が参加することで、多くの他の学者たちは、従来の歴史学、民族学、言語学、地名学などの研究の基礎の上に、さらに壮族は嶺南の土着民であるということを認識したのである。

壮族の物質文化、制度文化などについて、それぞれの分野の多学科の研究成果の証明によって人々は多くのことを認識した。それは古くから壮族は稲作中心の農業民族であり、壮族文化は、壮族人民が長きに渡って嶺南地域の生態環境の中

から産みだした物である。その伝統の基本的特徴は「那」文化、すなわち地域民族性を持つ稲作文化であり、漢民族文化とその他の地域の稲作文化とは、まったく異なる文化の形態であるということであった。

秦～漢代以来、壮族文化とその他の民族文化の間は、相互に影響を与え合い、融和し、度々の混じりあわせを経て今日まで発展してきた。子孫が代々と繁栄し、多種多様に一体化した中華民族文化の重要な部分を成立させている。この共通認識は、多くの壮族研究に従事する専門家や学者たちの多学科の理論と、方法を用いた研究を行なった結果である。

この認識によって、従来の嶺南地域の漢文化一元論の歴史観を打破した。そして長い間差別され、迫害された記憶がしだいに薄れ、ほぼ消え去った民族意識がようやく蘇った。それは「壮学」（壮族という学問）の提案、そして「壮学」の体系を設立するための理論、確実的な基礎を打ち出すことに繋がった。

1991年1月21日、広西壮学学会成立第一回壮族学術研究討論会が開かれた。ここに「壮学」がようやく誕生した。さらに1999年4月15日、広西武鳴県において最初の壮族国際学術討論会が開かれた。これは「壮学」のさらなる発展として、中国から世界に向かう象徴であった。

中華人民共和国政府が成立してから、特に鄧小平が改革・開放の政策を打ち出した後、壮族研究はさらなる発展の新時代に入った。研究領域はますます広がり、研究成果も実りが多く、さらにシステム化され、研究チームの人材も次々に増えていった。多学科・総合的な研究方法を利用することによって、我々の壮族研究の業績は、一層体系的に確立され、堅固な基礎を作りあげた。

この理念に基づいて1996年に私は「壮学体系を確立する個人的な見解」という文章を書いた。ここで壮学学会に対して、壮学体系を確立することを提案した。この文章は『広西民族研究』、『雲南社会科学』、中国科学院民族研究所の『民族研究動態』などの雑誌に発表した。民族学会の注目を得、その上多くの壮学研究学者からの支持も得た。さらに「壮族体系の確立」というテーマをめぐって各分野から理論上の詳細な研究が行われた。

『広西民族研究』には、いくつかのすぐれた論文が連載された。例えば潘其旭氏の「『那文化』を基礎として壮学の体系理論枠組みを確立する」(1998年第1期)^[58]、覃乃昌氏の「那文化圏論」(1999年第4期)^[59]などがある。

この夢を実現するために、1994年4月武鳴県で開かれた壮学の第一回国際学術討論会において、私は「壮学叢書」の編纂・出版を提案した。そのとき、会議に出席した国内外の学者たちの熱烈な賛同を得ることができた。特に当時の広西壮族自治区の主席李兆焯氏の支持を得た。『壮学叢書』の創刊と、安定、継続した出版により環境を作った。これは壮学会の仲間をおおいに鼓舞した。

国内外の数多くの壮学の研究者の長期に渡る研究によって、理論上に以下の結論を打ち出すことができた。

壮学は、壮族社会の共同体及びその文化を対象として、歴史的、現実的、及びその総合的な研究をシリーズとして行う学問である。壮学の研究対象は、壮族社会の全体である。壮族は、生物学上の壮族でありながら、また文化意味上の壮族でもある。壮族は自然的な属性を持ちながら、また社会的な所属性も持つ。壮族の研究は、この集団の独立的、人種的な起源の特徴や、その生活の自然環境、社会歴史の変遷とその文化特徴などを含める一方、その起源、古代、近現代の壮族の集団生活を含む、その歴史的な変遷と発展の法則をも研究する。壮学研究における壮族の文化は、広い意味の文化であり、壮族の集団が長い歴史発展の中で蓄積された物質文化、制度や精神文化である。その理論学上の内包的なもの、特徴、効用と発展の法則、またその他の民族文化との相互的な融合、吸収等の関わりが含まれている。すなわち壮学研究の内容と範囲は、壮族社会生活の各々の分野とあらゆる側面を含んでいる。歴史、言語、文字、宗教、哲学、経済、政治、軍事、文学、芸術、教育、人口、地理、民俗、心理、社会組織、社会変遷、现实生活等のすべての分野が含まれている。

我々はマルクス主義の民族的な観念や論証的な唯物主義、歴史的な唯物主義の方法論を持ち、毛沢東思想、鄧小平理論と「三つの代表」^[60]の重要な思想を持つ

て壮学の研究を指導していく。「三つの代表」の思想の中で、「先進的な文化に邁進する方向」の意味は、まさしく民族的・科学的・大衆的な文化であり、それは現代化、世界、未来に向けた文化でもある。以上二つの内容を合わせて考えると、江沢民氏は毛沢東の文化・思想を継承し発展させるといえる。それは「先進的な文化に向かって邁進する方向」の精力的な、最も重要な思想である。我々『壮学叢書』の編纂者と、壮学学会の仲間は、これらの思想と方向をよく理解し、しっかり把握しなければならない。その目標を持って壮学の研究を指導し、立派な『壮学叢書』を出版する。

壮学の研究が行なわれることは、重要な意義を持つ。第一に壮学の研究を通じて、人々は壮族とその歴史文化に対して全面的、体系的に認識させることができる。さらに各民族の相互の理解と団結を促し、わが国の社会主義の民族関係を一層発展させる。

第二に壮学の研究は、壮族自身が自らの民族、歴史、文化に対して深く理解し、民族的自尊心と誇りを高める。それによって壮族は、中華民族の偉大なる復興のためと国家の統一を保つために努力する。壮族は長期にわたって漢族の文化を中心とする影響を受け、その上統一した民族の文字による記録がないので、壮族文化のアイデンティティーが極めて薄い。歴史上、「漢裔（漢民族の末裔）」といった伝統的な概念が根深い。さらに近代に入ってから壮族は、すでに漢民族化されているという観念論もかなり大きく影響している。今日に至っても、なお「特色のないことが壮族の特色」という人さえいる。そこで我々が壮学の研究を実行する目的は、単に珍しいとか、「昔を懐かしむ感情」という目的からのスタートではない。それは壮族文化を讃え、より広め、壮族の自己認識を一層強化することを目的としている。また壮族文化に対する自覚的な意識を構築すること、民族の団結を前進させるように民族の結集力をさらに強化するためでもある。

第三に壮学の研究が発展すると同時に、壮族文化と世界の他の民族との文化交流の橋渡しを促したい。壮族地域の対外的な開放や経済発展を推進することは、重要な意味を持つ。

第四に壮学の最終目標は、壮族の優秀な伝統文化の継承と維持である。壮族の文化と現代化をリンクさせ、中華民族が復興する偉大な時代の中においても、壮族が国内の先進の民族に追いつき、最終的には壮族の現代化を実現させることにある。要約すれば壮学は、壮族の現代化を実現するための一翼を担うことに期待する。我々はまさに以上のような壮学の理論を持って叢書の編纂の指針とする。壮学の体系的な崇高な目標を実現するように努力する。

『壮学叢書』は、研究資料と研究著作の二大部分を有する。

壮学の研究資料は、壮学研究の基礎である。昔は統一した規範的な壮族文字がなかったため、またその他の歴史的な要因で、壮族はその他の少数民族・チベット族、満州族、モンゴル族、ウイグル族などのように、豊富な歴史文献資料を持たなかった。この重大な欠陥を補うため、壮族研究の基礎資料を収集する必要があった。これも壮学の体系とその他の民族学と異なる点である。叢書は壮学の研究資料の面において、1985年以来広西壮族自治区の古籍を収集・整理する成果の一つでありながら、より多くの人々の閲覧や研究を目的として提供している。

本シリーズは壮学研究資料として以下のように計画した。

1. 壮族の最も重要な古典の書籍を収集し、加えてマイクロフィルム化と、注釈、翻訳、校異などを行い、出版する。
2. 壮族の民間に流布する資料と、考古学の出土品から壮族歴史文化に関する資料を選び出し、学科ごとに分類し、歴史の時代順に編集出版する。
3. 壮族歴代の著名人の著作を収集整理し、出版する（これらの代表的人物の著作をまとめて出版することは壮族の文化資料を保存する重要な手段である）。
4. 壮族民謡の古籍を収集し、整理する。壮族民謡の古籍（言い伝えを含む）は内容が豊富である。かつてこれらの古籍と目された文学作品を選んで、中国語に翻訳して出版したことがある。しかしこれは意識であったため、壮族民謡をそのまま反映していない。本叢書は、広く集め、しかもそのままを直訳し、科学的な方法で整理出版する。

壮学の研究の専門著作シリーズは、おおそ壮族伝統文化の研究と、壮族現代

化の研究という二つの分野に分かれる。従来の壮族研究の成果は、主に伝統文化の研究に重点をおいていた。壮族は、中華人民共和国成立後、ようやく一つの民族として認められた。それ以来壮族は、中国で他の民族と同じような地位を得ることができた。民族政策の徹底的な実行に従って、民族の識別を行い、民族地域の自治化を実行し、民族の経済発展を一層推し進め、民族文化の芸術を発展させるなどの政策が次々と打ち出された。

壮族伝統文化の研究はその時代に合わせて生まれたが、現代に至って我々は壮族伝統文化研究に、終止符を打つことができたとは到底言えない。

以上述べたように壮族は古い歴史のある民族であり、壮族文化は独特な個性及び広く奥深い民族の源流を持っている。それに対して広範囲かつ系統的な研究は、壮学の科学的な体系を作り上げるためのものである。これも壮学叢書が求める大きな目標である。そのため我々は引き続き従来壮学研究の先人たちが努力してきたことを継承し、さらなる壮族の各種の歴史的な専門シリーズを作り、またそれに対する研究をいっそう深めなければならない。

具体的には壮族の経済史、軍事史、思想史、土司制度史、芸術史、文化史、教育史、化学技術史、体育史、医薬史などの研究がある。それらは、壮族伝統の文化のさまざまな特定のテーマの研究に力を注いでいる。例えば壮族の系譜、壮族の服飾、壮族伝統の祭り、壮族の婚姻習俗、壮族の葬送習俗、壮族の神話などの研究を行い、それと並行して壮族の歴史人物の研究にも力を入れた。例えば農智高、嶺毓英、嶺春煊、瓦氏夫人、陸榮廷、韋拔群、韋国清等の研究である。

壮学叢書の専門部分のもう一つの大きなシリーズは、壮族の近現代の研究である。壮族の近現代は、中国の国家の近現代発展と結びついている。二十一世紀において社会主義の現代化を実現することは、国家の最大の目標である。中国はWTO（World Trade Organization世界貿易機関）に加入し、西部地域の開発に戦略的な方針をも打ち出した。これは現代化建設、特に西部の現代化建設を加速させる大きな戦略である。この現代化は、壮族がようやく貧困と立ち後れからの脱却ができる唯一の方法である。それこそが本当に先進的な民族の仲間に入る

ことを意味している。それらを実行する過程で、壮族の近現代の研究は、壮族伝統文化の研究より難しく、長期に渡る極めて困難な研究である。その理由は、壮族自身の経済発展の遅れという現実によるものである。新中国成立以後、一世紀半ほど壮族は、トータルでみると基本的に衣食住という最低限の生活を送るのが精一杯であった。この二十年以内に「暮らし向きの安定している社会」を実現するには、さらなる大きな努力が必要である。

壮族研究の第一歩は現実に基づいて構想することである。まず貧困な壮族地域を経済的に助け、貧困から抜け出すことを研究のスタートとすべきである。その次はいかにゆとり社会に向かって進めるかということが、壮族地域の現代化を実現する為の重要なプロセスである。そこで壮族地域の暮らし向きの安定している社会に向かって検討することは、壮族の現代化を実現する問題の研究テーマとなる。歴史と現実的な原因によって、壮族の現代化と漢民族の現代化の間に共通点があるのは当然のことである。そのため我々は、漢民族の現代化の成果と経験を借りて、考察と研究を重視すべきであると考えます。もちろん壮族は自らの地域性と民族の特徴、歴史的と人文的特性は持っているため、その現代化の発展の規則性には独特なものがある。

壮族が現代化されるには、我々が目下直面している現実がまったく新しい課題であることに配慮しながら、広く多くの有意義な意見に耳を傾けなければならない。そのため「壮学叢書」編集委員会は、2002年7月南寧において初めて「壮族現代化学術フォーラム」を開催した。そこで壮族の現代化研究の重要性を打ち出した。壮族現代化の概念、発展過程、特徴と問題点、発展方向と目標、壮族伝統文化と現代化などの問題について詳細に検討した。壮族現代化と壮族伝統文化とのリンクは、壮族研究にとってもっとも大きな現実的な重要課題である。世界を眺めてみて、我々は、どの先進的な民族の現代化においても、必ず本来の伝統文化を継承し、融合していることを周知している。例えば比較的早い時代に現代化が実現したイングランド、フランス、ゲルマン、大和民族などは、みなそうである。わが国の漢民族でさえも、現代化の過程はまた同様である。当然、我々はそ

のまま彼らの真似をしてはいけない。壮族は伝統を維持しながら、外来の先進的な文化を受け入れ、他民族の経験も参考にすべきである。改革開放の時期、わが国は少数民族に対して、保護、保存を進める立場に立った。中華民族のすぐれた伝統文化を生かして、新たに少数民族地域の観光の発展を打ち出した。これらの日々新たな変化を受け入れ、益々繁栄することは、我が国の社会主義現代化のために、大きく寄与している。

その中、壮学は学問として民族の伝統文化と民族現代化とがリンクした研究となった。同時に社会主義の精神文明を進める運動の中で、いかに民族の伝統文化を扱うか、民族の現代化と民族の伝統文化を結びつけるか、ということが重要な課題となる。私は「三つの代表」の思想に基づいて、「先進的な文化は前進の方向である」という精神を持つべきであると考ええる。いかなる現代化の実現も、必ず自らの民族の土地の上に根を下ろす。それゆえに自らの特徴を持つことができる。そこで根を張り、葉を茂らせ、花を咲かせ、実を実らせる。どのような民族文化も、必ず現代化に、世界に、未来に向かってこそ、ようやく社会のために継承、発展することができる。この認識に基づいて、本叢書は、壮族の現代化と伝統文化の総合研究を、壮族の現代化を研究する範疇の内におさめている。壮族の伝統文化の研究と比較して現代化の研究は、いまだ初歩の段階である。この研究に対して志を持つ学者たちは、方向性を定め、いっそう努力して足をしっかり地につけて、この時代の呼びかけに応じられることを願う。

『壮学叢書』の出版は、壮族研究が新しい段階にさしかかっていることを示している。『壮学叢書』が、二十一世紀初期に出版されたことは、時間上の偶然ではない。歴史的な必然である。さまざまなプラス要因が、凝縮された現れである。歴史を振り返ると、もし二十世紀の長い間、壮族が反帝国主義・反封建社会との闘いに参加し、新たに民族地位を得、民族の平等を求め、民族地域を自治する権利を得た時期とするならば、二十一世紀は壮族を含む中国のすべての少数民族がともに繁栄し、偉大なる復興に向かう時期であると言えよう。そのため『壮学叢書』の編集者と数多くの壮学研究界の同志たちは、自覚的に時代の呼びかけに応

じて、歴史的な使命感を背負い、粘り強く勤勉に『壮学叢書』という崇高な夢を実現するために一層努力すべきであろう。

2003年3月9日作

【注】

【注1】熊本学園大学講師・熊本県立大学講師。文学博士。中国広西壮族自治区出身。

【注2】嶺南東道は唐代の地方行政区画の一つ。嶺南は五嶺(湖南省の衡山から東へ、海に至るまでの山系。五つの嶺がある)南、広東・広西・安南の地を含む地区。当時は嶺南道東部(現在の広東省・広西の東北部及び海南島等)と嶺南道西部(広西の西南部・雲南省・貴州省の一部及びベトナム中部までの地域)に分かれていた。

【注3】馬援は扶風茂陵人で、漢武帝の時(紀元前14～紀元後25年)に活躍した將軍。伏波將軍・樓船將軍ともいう。匈奴、西羌等を打ち破り、交趾(今のベトナム)の徵側、徵貳姉妹の乱を平定した。『史記』巻113「南越尉趙佗列伝」によると、「元鼎六年冬、(樓船將軍・馬援)以数万人待伏波(中略)城中皆降伏波」とある。漢武帝は伏波將軍を嶺南に派遣して、呂嘉等の反乱を打ち破ったという。さらに『後漢書』巻54「馬援列伝」には「援所過輒為郡県、治城郭、穿渠灌溉、以利其民。条奏越律與漢律、駁者十餘事。與越人申明旧制、以約束之」とある。越の民のために、役所を設け、城郭を築き、水利工事等を行った。

【注4】秦時代、中央政權から多くの内陸地の民を嶺南地区に移住させ、趙佗をリーダーとして派遣した。『史記』巻113「南越尉趙佗列伝」には「以謫徙民、與越雜处十三歳。佗秦時用爲南海龍川令」とある。また「秦已破滅、佗即擊並桂林・象郡、自立爲南越武王」とあり、趙佗は桂林郡と象郡を合わせて建国し、自ら南越王と称した。

【注5】『史記』巻113「南越尉趙佗列伝」には「秦已破滅、佗即擊並桂林・象郡、自立爲南越武王。(中略)漢十一年、遣陸賈因立佗爲南越王。與剖符通使、和集(輯の通音字)百越」とある。趙佗は初代の南越王になり、「和輯百越(わしゅうひゃくえつ)」の融和民族の政策によって百越の民をまとめ、治めた。この政策は嶺南地域を管理する中枢は、越人にまかせることで、多くの越人を王侯に冊封し、軍の要職に採用された。政權の利益を共有することで、越人の懐疑心や不安感を解消した。

【注6】「那」は壮族語で、稲作という意味である。那文化とは稲作に関わる文化のこと。詳細は覃乃昌氏の「那文化圏論」（『广西民族研究』所収。1999年第4期）を参照。

【注7】土俗文字は、秦漢以後は、漢民族の流入の影響に従い、壮族先住民は漢字の形、音、意の六書構字法を借りて、自民族の文字の古代壮字、或いは「土俗字」、「方塊壮字」と呼ばれる文字を作った。宋・范成大撰『桂海虞衡志』「雜志・俗字篇」には、「邇遠俗陋、牒訴券約、專用土俗書、桂林諸邑皆然」と、この文字に関する記載がある。現在ベトナムで使われている喃文字とは異なるが、共通部分もある。

【注8】清・吳淇（1615～1675年）は、順治十五年广西・潯州の推官であった。在任中に壮族をはじめ、その他の少数民族の民謡を数百篇を収集し、まとめて『粵風統・九』（四卷）とした。現在壮族の民謡を研究する際には重要な参考資料である。

【注9】歌掛けは壮族の老若男女が好んで行う歌垣のことで、相互に歌を掛け合うことを指す。壮族は歌をよく好み、農閑期や春節・中秋節等の行事において、野外の水辺や山の麓で歌会をする。歌会には、「祭りの歌会」「臨時的・即興的歌会」「競技的歌会」という三種類がある。そのうち最も盛大に行われるのは旧暦の「三月三」の歌会である。广西壮族自治区に住む各少数民族の、伝統的な祝日である。古くは上巳(sì)節とも言い、魏晉以後、上巳節は三月三と改め、代々踏襲している。水辺で宴会を開き、郊外で遊ぶという風習である。壮族の歌会は唐宋時代から記録がある。

【注10】清・屈大均撰『広東新語』巻八「女語」〈劉三妹〉の条には「新興女子有劉三妹者、相傳爲始造歌之人。生唐中宗年間、年十二。淹通經史、善爲歌。千里内聞歌名而來者、或一日、或二三日、卒不能訓和而去。（中略）三妹今称歌仙。凡作歌者、無論齊民與狼・僜・僮人・山子等類。歌成、必先供一本祝者藏之。求歌者就而録焉、不得携出。漸積遂至数筐」とある。ここに劉三姐（現在の呼び方）が唐代既に歌を作る女流名人であったことを記している。劉三姐の誕生は、壮族の歌掛けのシンボリックな存在である。また現実生活の中で歌の才能が開花した歌師（歌の先生）の化身であり、その聡明さ、歌の機巧、そして精神力は壮族の人々に偶像化された崇拜の対象であった。また歌の神聖化の表れでもある。

【注11】嘹歌は壮族の民間の歴史や風習等を歌う歌の形式の一つである。長さ二万行ほどある長歌である。その歌の形式は男二人、女二人で歌を掛け合い、内容は恋愛歌を中心としている。

その形式は、はじめと終りの歌詞を復唱することと、五言四句を二聯一単位としている。一般的には最初の一文字は頭とし、最後の文字は終りとする。押韻が必要である。

現在多くの唱本があり、もっとも古いものは唐・宋時代のものである。明代まで流行していたが、新しいものも作られている。主に広西壮族自治区右江流域の平果・田東・田陽県等の地域を中心に、また紅水河流域の馬山県でも歌われている。およそ百以上の村落、千三百あまりの集落で流行している。最近海外でもよく上演するようになった。詳細は2004年『百色学院学报』に掲載された農冠品氏「泛説右江流域壮族嘹歌」を参照されたい。

【注12】師公は、壮族の師公教の男巫のこと。師公教は道教が壮族地区に入ってから、壮族特有の信仰と融合し、新たな宗教として生まれたもの。師公は半農業・半宗教的な存在でありながら、妻子を持ち、禁酒等厳しい戒律はない。主な仕事は、法事や様々な祭事等を行い、「跳神」（神降ろしの託宣）といった祭事の主導である。詳細は楊樹喆の『壮族民間師公教——巫儺道釈儒的交融和整合』（広西師範大学出版、2009年）を参照。

【注13】師公劇は、師公教の法事・雨乞い等の祭事を行う際に、師公が各種の儺面（三十六種の神様・七十二種の儺面・合わせて一〇八種の役あり）をかぶりながら、おのおのの祭事の音楽に合わせて、経文を唱いながら踊ること。主に広西壮族自治区の貴県、樟木と龍山等の壮族居住地に現存する。

【注14】羈縻(きび)制度は、唐代から諸王朝が外族内部の行政組織をそのままにして外族を統御する伝統的政策をいう。羈縻州制度とも称される。中央政権が各地域の少数民族に対して行なった融和政策の一つであり、一般の行政区画と異なる管理機構で、少数民族地域だけに置かれた。その民族習慣に従って管理する制度である。『新唐書』巻43下「地理志下・羈縻州」には、「唐興、初末暇於四夷。自太宗平突厥、西北諸蕃及蛮夷、稍稍内属、即其部落列置州县。其大者为都督府、以其首领以都督刺史、皆得世襲。虽貢賦版籍、多不上戸部」とある。

【注15】土官制度は元代以後、中華民国時代まで、西南地方に置かれた地方官制度。土司制度と同じ。中央政府から諸少数民族の長に官職を授け、従来の慣習に従い土民の統治を許した。『元史』巻26「仁宗紀三」によると、「雲南土官病故、子姪兄弟襲之。無則妻承夫職」とある。雲南の土官は病気で亡くなると、子、姪、兄弟がそれを世襲できる。男系の継承者がいない場合は、妻が夫の職を受け継ぐことができるとあり、世襲制であることが分かる。

【注16】「改土帰流」とは明以後、中国の西南地方に住む少数民族に対する政策をいう。改土帰流は土司、土官を改め、流官(朝廷任命の正式官吏)とする意。古くは中原の文化の及ばない、いわゆる化外の民として放置された少数民族は、元代以来その土着民を土司、土官とする間接統治にゆだねられていた。その土司制度を廃止し、中央政府直轄の州県制に転換させ、科挙に合格して選抜された「流官」を派遣して、直接統治するなど一連の制度転換であった。『明史』巻312「四川土司二」には「十九年、(貴州巡撫叶)夢熊主議、播州所轄五司改土爲流、悉属重慶」とある。

【注17】土司制度は、中国の元代以後、民国時代まで、少数民族の族長で世襲の官爵を与えられた者、またはそのような制度をいう。西南地域は古くから山岳民族が居住していたが、これら諸民族に対して中国の政治力はほとんど及ばなかった。元代になってこれらの地方を統治するために、首長に政府から官職を授け、その慣習に従って自治を行なうことを許した。この官職を土司(土官)と呼び、その地位は世襲を許された。『元史』巻91「百官志七」には、「諸蛮夷長官司、西南夷諸溪洞各置長官司、秩如下州。(中略)参用其土人」とある。明代には土司制度は完成し、清朝もこれを受継いだ。『明史』巻317「広西土司一」には、「正統四年(1444)奏、本府所轄東蘭等三州、土官所治。歴年以来、地方寧靖。宜山等六県、流官所治。洞溪諸蛮、不時出沒」とある。

【注18】清・李調元撰『南粵筆記』巻一「粵俗好歌」に「粵俗好歌、凡有吉慶、必唱歌以爲歡樂。(中略)東西兩粵皆尚歌、而西粵土司尤盛」とある。「粵」は「越」の通音字である(以下同じ)。

【注19】注10同書の巻十二「粵歌」の条には、「粵俗好歌(中略)才華斐美者爲貴。(中略)幼即習歌、男女皆倚歌而配」と記されている。

【注20】劉錫蕃氏撰『嶺表紀蛮』第十八章「歌謡」には、「因此蛮人無論男女、皆認唱歌爲其人生觀上之切要問題。人而不能唱歌、在社会上即枯寂寡歡、即缺欠恋愛求偶之可能性。即不能号爲通今博古、而爲一蠢然如豕之頑民」と記されている。

【注21】墟は元住居があった場所の意。後に臨時の市場を指す。「歌墟」は臨時の歌合戦の場を指し、一つの村落、あるいは複数の集落の人が一堂に会して、畑・山間・河川の辺・岩洞等至る所で歌を歌い、舞を舞う。若い男女には配偶者を選ぶ機会でもある。なお壮族語で「歌墟」は楽しい市の意味でもある。

【注22】北方壮族は広西壮族自治区の北・主に柳州や桂林の周辺に住む壮族の集団。南方壮族は南寧より南を中心とする地域に住む壮族の集団。邕江とその西北にある右江を分水嶺とする。それぞれの方言はかなり異なり、交流も難しい。そのうち特に南方壮族の言葉は、よりタイ等東南アジア諸国の言語に近い。

【注23】注20同書の第二十章「娛樂的種々」六〈墟会〉には、「墟会有節会、常会二種。節会即以祭節之日行之、常会不拘節期之日行之。凡農隙之日、每值墟期、即会歌聚飲於此。其熱鬧雖次於坡会、然三日五日一墟期、到者常達数千人、亦殊有可能觀。此等歌墟、在鎮南田南兩道之地、爲数尤多」とある。農閑期になると、数千人が市場に集まり、歌掛けをするのだという。

【注24】竹枝詞は、もとは千年あまり前、楚の地方に興った民間の歌謡である。唐代になると、この蛮人の地の歌が長安の文人たちには珍しく新鮮に映ったため、それらを採集し、手を加えて修正したものを、劉禹錫や白樂天等によって広められたものである。当時の詩歌の形式の一つとなり、地方色の豊かな民謡の地位を得た。粵歌も似通っている所がある。清・屈大均撰『廣東新語』卷十二「粵歌」の条には、「其短調踏歌者、不用絃索。往々引物連類、委曲譬喻、多如子夜竹枝」としている。

【注25】『漢書』卷95「西南夷两粵朝鮮伝」には、漢昭帝の始元5年（公元前82年）の記事として、「鉤町（同句町）侯亡波率其邑君長人民擊反者、斬首捕虜有功。立其亡波爲鉤町王」とあり、句町国の創立を記している。また同伝には「王莽篡位、改漢制。貶鉤町王以爲侯。王邯怨恨、牂牁大尹周钦詐殺邯。邯弟承、攻殺欽州郡。擊之不能服、三辺蛮夷愁擾尽反。復殺益州大尹程隆」とある。前漢末期に王莽が政権を奪い、句町王を侯に貶めたため、不満を持っていた王邯が造反蜂起をしたことが記されている。

【注26】『後漢書』卷116「南蛮西南夷伝」〈南蛮篇〉には、「礼記称南方曰蛮雕題・交趾、其俗男女同川而浴（中略）今烏潯人是也。（注、万震南州異物志曰、烏潯地名也。在広州之南、交州之北）」とある。烏潯人は壮族の先祖である。後漢の烏潯人の暴動については、同書同巻に「光和元年（178年）、交趾合浦烏潯蛮反叛」と記録されている。

【注27】『新唐書』卷222「南蛮伝下」〈西原僚〉には、「西原僚居広容之南、邕桂之西（中略）西接南詔。至徳初、首領黄乾曜（中略、等諸）洞蛮皆叛。（中略）攻桂管十八州。所至焚盧舍、掠士女、更四歳不能平（中略）遣中使慰曉諸首領賜詔書、赦其罪、約降（中略）斬黄乾曜…」

とある。広容の南、邕桂の西に住む西原僚（壮族の古称）は、至徳（583年）初め、首領の黄乾曜氏が諸洞蛮を率いて叛乱をおこした。唐代嶺南地域における最大級、しかも最長期の少数民族・西原僚人黄乾曜（?年～760年・壮族人）等七人による蜂起運動である。

【注28】 區希范（?－1045年）は、北宋・瓊州思恩県（今広西壮族自治区瓊江毛南族自治县）の人。『宋史』巻496「蛮夷伝」〈瓊州蛮・區氏〉に「瓊州蛮區氏、州隸宜州羈縻領思恩・都毫二県。有區希范者、思恩人也。狡黠頗知書（中略）與其叔正辞応募従官軍討安化州叛蛮（中略）正辞率其族人及白崖山酋蒙趕、荔波峒蛮謀爲乱（中略）白崖山酋蒙趕爲帝、正辞爲奉天開基建国柱王、希范爲神武定国令公」とある。宋・景佑五年（1038年）に區氏叔姪二人が中心となって、中央政權に対する不満から反乱を起こした。その際、區氏一族を率いて、荔波洞蛮夷とともに行った反朝廷運動であった。白崖の山酋・蒙趕に帝王を薦め、叔父の正辞は奉天開基建国柱王とし、區希范は神武定国令公とした。

【注29】 儂智高は壮族の民族英雄である。1025年～1055年頃、北宋に対する反乱の指導者である。『宋史』巻290「狄青列伝」には「皇祐中、広源州蛮・儂智高反、陥邕州。又破沿江九州、围広州。嶺外騒動（中略）青上表請行。翌日入对自言、臣起行伍、非戦伐無以報国。願得蕃落。（中略）擒賊五百餘人、智高夜縱火燒城遁去。遲明青按兵入城…還至京師、帝嘉其功、拜樞密使、賜第」とある。皇祐三年（1053）広源州蛮・儂智高寇が邕州で反乱を起こしたが、すぐに宋軍の將軍狄青の出兵によって捉えられた。

【注30】『明史』巻317「広西土司一」には、韋銀豹による古田八寨の暴動が詳細に記録されている。「初桂林、古田僮種甚多。最強者曰韋（中略）時韋銀豹與其従父朝猛、攻陷洛容県、據古田。分其上、下六里。銀豹出掠、挾下六里人行、而上六里不與焉。五年提督呉桂芳因其間、遣典史廖元入上六里撫諭之。諸僮者復業者二千人、銀豹勢孤請降。（中略）既而生縛銀豹、並其子扶枝膠送京師、斬之。古田平、乃並八寨與龍哈、啼咳爲十寨。立長官司、以黃昌等爲長官土舍。聽守御調度。（中略）万歴六年（1578）斬首四万人百余級、嶺表悉平」とある。桂林古田の僮（壮族）韋銀豹は、嘉靖年間（1522～1566）その叔父朝猛と共に暴動を起し、古田に拠点を据え、屢々官吏を殺した。

【注31】 清の末年に広東・広西中心に起こった反乱。指揮者の洪秀全は、広東花県人。太平天国運動の首領である。キリスト教を信仰し、道光末（1850年）広西より起こし、馮雲山等に従い、

自ら天王と称した。太平天国を建号し、頻りに制度・律令を定め、屢々清軍を破った。後に諸將が権を争って弑殺するに至ったが、それに乗じた曾国荃等に囲まれて、自殺した。凡そ十五年にして亡ぶ。

【注32】 清末、清朝政権に反抗し、明朝に復歸することを旨とした民間の秘密結社の運動。

【注33】 革命家の孫文は、1911年に辛亥革命を起こし、清朝の封建制度を倒し、中華民国を打ち立てた。しかしそれが次第に北洋軍閥の手に陥り、壮族地域は旧桂系の軍閥陸榮廷によって独占された。その後軍閥間で内戦が起った。

【注34】 干欄は高床構造の建物をさす。高床式住居のこと。また「干欄屋」「高脚屋」「吊脚楼」「棚屋」ともいう。今から6000～7000年前とされる浙江省の河姆渡遺跡から各種の柄（ほぞ）、柄穴を加工した木造部材が出土した。これらを始めとして、同種の遺跡は新石器時代から歴史時代まで、干欄文化は浙江、江蘇、湖北、雲南省などで発見されている。中国の西南少数民族地域を中心に、東南アジア、マダガスカル、台湾等の地域でよく見かけられる。日本の神社や穀物の倉等もその作りが多い。主な特徴は竹や木造で上下二段式に建てられ、上は人間が住み、農作物の倉庫とし、下は家畜の小屋となる。階段で上り下りする。亜熱帯地域に特有な湿気、暑さやまた爬虫類・獣の被害をも防ぐ事ができる。地域により、水上生活者の家屋は水中や河川の岸辺の水上に立てられる事もある。香港周辺に多く分布している。なお上の住居にあがるとき使う階段は、一本の木を削って階段状にしてある。

【注35】 銅鼓は、銅でつくった太鼓のこと。清・屈大均撰『広東新語』巻15「貨語・銅」によると、広西右江流域に銅の産地があり、地面を一尺ほど掘ればすぐ銅があると記録されている。故に蛮人は好んで銅器を作るといふ。『後漢書』巻54「馬援列伝」には「馬於交趾得駱越銅鼓」の記録があり、その唐・李賢注には「裴氏広州記曰、俚獠鑄銅爲鼓。鼓雅高大爲貴、面闊丈餘。初成懸於庭、剋晨置酒招致同類。來者盈門豪富子女、以金銀爲大釵、執以叩鼓、竟留遣主人也」とある。後漢時代からすでに幅丈ほどの大きな銅鼓が作られていた。しかも金持ちの象徴として祭儀の時に使われた。詳細は唐代・劉恂撰『嶺表錄異』巻上「銅鼓」の条を参照。銅鼓の高峰期の代表類型「北流型」・「靈山型」・「冷水冲型」とは、嶺南地区における銅鼓文化の三つの最盛期を代表する銅鼓の類型である。凡そ漢代から隋唐までの間に作られたものである。広西壮族自治区の北流県・靈山県と湖南省の冷水冲県等にあるという分布地域は、互い

に隣り同士であり、製作の時期も近い。鼓の形やその耳等、模様（蛙・鳥・羽人等）も互いに共通性を持ちながら、独自の特徴も見られる。1950年广西壮族自治区北流県六靖鎮の水冲庵で「世界銅鼓の王様」が出土された。目下世界中最大の銅鼓である。現在广西壮族自治区民族博物館に展示されている。

【注36】珠江は中国で三番目に大きな河川。総流量で計算すると、全国二番目である。全長2400kmで、雲南省の東境から発し、貴州省・广西壮族自治区・湖南省・江西省等を経て、最後広州から南シナ海に注ぐ。その名の由来は清・顧祖禹撰『読史方輿紀要』「広東二・広州府」によると、「江中有海珠石、是曰珠江」と、珠江の中州に「海珠」という名の石があるため、珠江と呼ばれていた。主に西江（2197km）、北江（468km）と東江（523km）の三つの川の流域、及び河口の珠江デルタから形成され、ベトナムの一部を含めて「珠江流域」と称する。南方内陸の水路網として発達している。

【注37】凌純声『中国辺疆民族與環太平洋文化』「那文化」について言及した（台湾・聯経出版事業公司、1979年）。

【注38】蘇秉琦『中国文明起源新探』による（北京・生活・読書・新知三聯書店。1999年）

【注39】花山壁画は広西南部崇左寧明県、左江流域の支流寧明江のほとりにある。戦国秦時代以前から漢代にかけて、西甌・駱越先住民達の絵画芸術の集大成である。赤い鉱物の顔料を用いた壁画が、長さ172メートル、高さ90あまりの崖壁に残されている。現存図像は1900箇所あり、主に人物・動物・器物の三種類がある。祭事の儀式を表す場面もある。この川沿いの山間にある巨大な壁画は、その規模、勢い、広大さから中国最大級のものとされている。内容の豊富さや保存の良さ、また造形の素朴さと風格のおおらかさにより、2016年7月15日世界文化遺産に登録された。

【注40】双肩石斧は新石器時代の石器である。広西紅水河流域で発見された化石で、長さ7.1cm、幅4.6cm、幅5.3cmの二つの肩がついているもので、南方稲作の「那」文化圏に多く出土される。

【注41】大石鏟とは、近年広西・南寧市の周辺で、考古学者たちの手により石製のカンナが300個あまり発掘されたものを指す。およそ4000年以上前の新石器時代晩期のもので、稲作文化との関わりがあるとされた。それらは广西壮族自治区・広東・海南島およびベトナム北部地域を中心に発現されたため、この地域は「大石鏟文化圏」と称される。そして最新の研究結

果によると、広西壮族自治区は古くから稲作の資源が豊富な地域であり、未だに野生稲の資源もあるため、中国の稲作文化の起源と分布においても、重要な研究対象地域であることがわかった。石鏟は大きさから言っても、農作業に不向きで、古代祭祀の道具であろう。

【注42】エンゲルス、人名。ドイツの十九世紀の思想家・哲学者、マルクス主義の創立者でもある。

『馬克思・恩格斯撰集』第四卷「家庭私有制度和国家起源」による。(北京人民出版社、1972年)

【注43】麽教または魔教は、壮族の師公教とも呼ぶ。史記によれば漢代以前にも「越巫」というものは嶺南に存在した。万物神霊、祖霊信仰、占トと蠱術等の多神教で、未熟な信仰とされた。しかし近年、道教に対しての影響は少なくないという指摘もある。経典には「布洛陀経詩」がある。麽教経書とは、麽経布洛陀のこと。壮族の聖書のようなもので、また壮族古神話集でもある。最初は口伝によるものであったが、明清以後壮族の土俗字・方塊字で記録が始まり、抄本が数多く出された。現在は『壮族麽経布洛陀影印訳注』が有名である。その中に麽教に登場する壮族先住民の、「十二国」と呼ばれる十二種類の動植物等のトーテム信仰（麽経布洛陀には「天下十二国、生出十二王、各国不相同。一国蛟变牛、一国馬蜂紋、一国声如蛙、一国音似羊、一国魚变蛟…」）が記されている。

【注44】コフーン (A.R.Colquhoun 1848～1918年) は、南アフリカ出身のイギリス宣教師、一生の多くを旅で過ごした。本書は広東・広西及び東南アジア文化を中心に、まとめた紀行文である。

【注45】テリアン・ド・ラクペリ (Terrien de Lacouperie) はフランス出身のイギリスの東洋学者。ロンドン大学の教授。1880年以後、漢民族と中国文化の起源が古代オリエントにあると説く多くの著作を発表した。

【注46】ピエール・ルフィーヴァ・ポンタリス (Pierre Lefevre Pontalis) は、1864年フランスのバリに生まれた外交官である。東方言語学・マレー語専門であったので、1889年に外交官となり、商務部に入った。1894年にインドシナ大使館員としてラオスに着任し、メコン川流域におけるイギリス及びフランスの代表となった。1938年の死去までラオス・タイ・ミャンマー・中国南部等インドシナ半島の文化や歴史に関する著書を多く残した。

【注47】H.R.デイビス (H.R.Davis. 1865～1950) はイギリス人。英国陸軍将校とイギリスの諜報機関のメンバーだった。1894年から1900年の間、現代の中国雲南省、四川省への揚子江

上流でイギリス占領下のビルマを結ぶ鉄道の可能なルートを発見するために、イギリスの政府から依頼された。この本は、雲南省の旅行記として書かれ、最初は 1909 年に公開された。雲南省に関する最初の詳細な報告書である。社会、多様な先住民族の文化、地理、経済、地域の政治情勢、遠征の政治的文脈と東南アジアの鉄道建設の詳細に言及した。

【注48】ウィリアム・クリフトン・デッド (W.Cleifton Dodd. 1857～1919) アメリカ人。マコーミックの神学大学を卒業し、1886年にラオスへ渡る。その後、東部ビルマと中国南部を調査旅行し、少数民族のタイ族に関する論文を発表した。

【注49】W.A.R ウッド(W.A.R.Wood)はイギリス人。1918年タイの総領事に任命された。1926年にタイの歴史研究を発表した。

【注50】「シャムの歴史の父」と称されるタイの丹隆親王のこと。1925年に『シャム古代史』をまとめた。西洋の学者以外にアジア人として最初に壮族を研究した。

【注51】パイエヤヌマンロロトンは、不詳。『タイの掸族に関する系統的な考察』の論文を書いた。そこで彼は、広西など各地の壮族の状況について数多く論述した。

【注52】鍾敬文 (1903～2002年)、広東省海豊出身の客家人。中国民間文学と民俗学を開拓した学者の一人である。「中国民俗学の父」とも呼ばれている。1934年日本の早稲田大学文学部に留学し、帰国後香港達徳学院・中山大学・浙江大学と北京師範大学等で教鞭を執りながら、顧颉剛氏等と共に中国の民俗学会を創立した。「僮民考略」など数多くの壮族に関する論文を発表した。

【注53】劉錫蕃は、本名劉介 (1885～1968年)。晩清・中華民国時期の学者。広西百寿県西門人。二十世紀三十年代には、広西特種師訓研究所の所長に任命され、また広西通志館にも勤めた。少数民族の研究に没頭し、度々少数民族地域に入り、広く民族の資料を集め、1934年商務印書館から壮族研究の最初の著作『嶺表紀蛮』を出版した。本書には壮・瑶・苗族等の少数民族の起源、風俗習慣、経済、文化等に対する記述がある。特に少数民族の移動・住居、飲食、服飾、家庭構成、婚姻、葬式、言語、歌謡及び土司制度等に関する記述が詳しい。

【注54】徐松石 (1900～1999年)、広西容県の客家人。著名な教育者・神学者 (牧師)・民族研究者・文字研究者及び歴史学者である。1918年上海の滬江大学に入り、社会教育を専攻した。卒業後上海崇徳女子中学校の校長となり、滬江大学と華東大学等の教授にも歴任した。1926年から東南アジアの民族史に関心を持ち、中国の西南地域に入り、苗・瑶・壮の村々で現地調査

を行った。長年嶺南民族歴史文化の研究を続けてきた。壮族を研究する先駆者として多くの中国の民族研究に関する書物を書き上げた。1938年に書かれた『粵江流域人民史』は、中華書局で出版された後、日本語に訳され、かなり独自の見解を持つ論著であった。さらに1947年の『タイ族壮族粵族考』は、全国學術著作賞を受賞した。1957年アメリカに移住し、中国語と英語で、嶺南文化の銅鼓や神話等を紹介し、壮族の文字の研究に力を注いだ。

【注55】鳥居龍藏 (1870～1953年) 日本徳島県出身の人類学者・民族学者及び考古学者である。1939～1951年燕京大学 (現在の北京大学) の客員教授。中国のみならず朝鮮、蒙古、シベリア、台湾、北千島などの民族学的調査をおこなった。そしてそれらを背景に日本民族形成論を展開した。

【注56】河原正博『漢民族華南発展史研究』(吉川弘文館、1984年7月)。1944年第二期『南アジア学報』に「左江、右江流域の蛮酋の始祖」について発表した。

【注57】2005年5月11日、広西壮族自治区田陽県で開かれた壮学第四回学術會議において、広西民族研究学会とタイ芸術大学の学者が共同研究成果を発表した。その際、初めて考古学・言語学・社会学等の分野から様々な研究を行った結果、ようやく「タイの泰族と広西の壮族の間に、共通の先祖起源 (西甌・駱越) があり、後に各自異なる独自の発展を成し遂げた」という結論を打ち出した。その研究成果 (研究者55人による論文) はまとめられ、『壮泰民族伝統文化比較研究』(共五巻) という大著が出版された。

【注58】潘其旭「以〈那文化〉研究爲基礎、建立壮学体系的理論構架」(『広西民族研究』、1998年第1期)

【注59】覃乃昌「那文化圈論」(『広西民族研究』、1999年第4期)

【注60】「三つの代表」(Three Represents) は、2000年2月25日江沢民総書記が、中国共産党設立八十年の記念式典において提案した中国の特色ある社会主義の新思想であり、新しい時代の中国共産党の指針である。

【参考文献】

『史記』『漢書』『後漢書』『魏書』『隋書』『新唐書』『元史』『宋史』『明史』等(『二十五史』所収。

上海古籍出版社、一九八六年十二月)

宋・范成大『桂海虞衡志』(胡起望等校注、四川民族出版社、一九八六年九月)

宋・周去非撰『嶺外代答』(楊武泉校注、中華書局、一九九九年九月)

清・吳洪撰『粵風統・九』(電子書百科・集部・四庫全書百科による)

清・屈大均撰『廣東新語』(香港中華書局、一九七四年二月)

清の李調元撰『南粵筆記』(嶺南文庫『清代廣東筆記五種』に所収、広東人民出版社、二〇一五年五月)

劉錫蕃『嶺表紀蛮』(アジア民族考古叢刊第五輯、南天書局、一九八七年一月)

唐・劉恂撰『嶺南録異』(山川風情叢書『南方草木狀』外十二種所収、上海古籍出版社、一九九三年十二月)